

新島襄のもう一人の恩人 J・H・シーリー教授

井上勝也

(大学文学部教授)

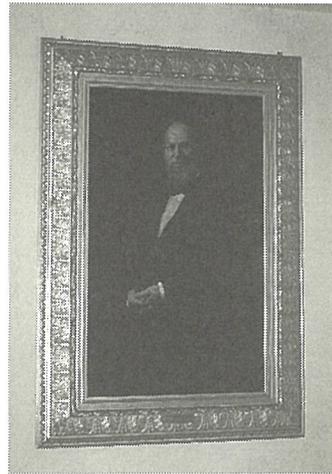
新島襄の第一の恩人がハーディー夫妻であるとすれば、第二の恩人はシーリー教授夫妻であるということができ、このシーリー教授が一八九五年五月二日に亡くなったので、今年が丁度一〇〇年目にあたる。

新島の四七年の生涯の中でニューイングランドを中心とした九年間の海外生活は彼の思想形成及びその後の生き方に決定的に大きな意味をもっていたと考えられるが、その中でもとりわけアーモスト・カレッジ時代の三年間が帰国後の一五年間の彼の生き方を決めたともいえる程に大きな意味をもっていた。人間教育の大切さも、同志社大学設立構想も、祖国にキリスト教を宣べ伝えようとする大きな志もその萌芽はこの三年間にあつたといえるからである。

新島のアーモスト・カレッジ時代は一八六七年から七〇年まで、二四歳から二七歳までにあたるが、この間シーリー教授及び夫人からの影響・感化が非常に大きかったことを申し述べたいと思う。

I

新島が初めてシーリー (Julius Hawley Seelye, 1824-95) に会ったのは一八六七年八月三一日午後六時四五分、アーモストの小さな停車場であった。彼はボストンを午後二時五〇分の汽車に乗って、約四時間かけて初めてアーモストの町にやってきた。九月からアーモスト・カレッジ (Amherst College) に入学するためである。彼は一八六五年一〇月末から六七年六月までフィリップス・アカデミー



(Phillips Academy)に学び、卒業してからさらに高等教育機関で学びたいという願望をハーディー夫妻にもらしたところ、ハーディーは彼が理事を勤めているアーモスト・カレッジに入学の手続をとってくれた。ハーディーは親友のシーリーに宛てて新島を紹介する手紙の執筆を、新島と共に一年八カ月間同じ家で生活したフリント (Ephraim Flint, Jr.) に依頼した。フリントは長年アカデミーの校長を勤めていたが、牧界に自己の生きる道を見出し、アンドーヴァー神学校 (Andover Theological Seminary) の学生として新島と同じヒドゥン家に下宿していた。新島のように家庭教師であり、相談相手であったフリントはシーリー宛の紹介状に新島について次のように書いている。「彼は貴方のもとで mental philosophy を学ぶことを望んでいます。」と述べ、続いて「彼は行儀作法において gentleman です。私は一回も彼が無作法であることを知りません。(中略)彼は秘かに祈ることを最も忠実に守っています。彼は最も献身的なキリスト者と交わることを好みます。彼は控え目で遠慮勝ちで、彼の本当の価値はすぐには現われませんが、しかし彼は最も優れた人間の一人であり、最も信頼に価します。彼の言葉は真実です。」と述べている。「私は長年教師をしてきましたが、彼ほど興味のある生徒を知りません。」とまで書いている。フリントは教師の眼で新島をよく観察している。新島はこのような内容の紹介状をもって、一人

でアーモストの停車場に降りると、シーリーが迎えに来ていた。新島はシーリーとの出合いをフィリップス・アカデミー時代のホスト・ファミリーであったミス・ヒドゥンに宛てた手紙で次のように書いている。「シーリー教授が停車場で私を出迎えてくださり、旧知のように私を迎え入れて下さいました。」と安堵の気持を伝え、「私はまだ寮が使えないので、現在シーリー教授宅に滞在していますが、シーリー教授は私がかつてお会いした人達の中で一番信仰心の厚い人で、彼の家族は大変気持よく、私に親切にして下さいます。」とシーリー及び家族についての第一印象を伝えている。

新島はアーモスト・カレッジ在学中、シーリーを教授としてのフォーマルな関係を越えて、シーリー家をホスト・ファミリーとして、ときには自分の両親に近い親しみと敬愛の念をもって捉えていることが手紙の随所に見られる。これは逆にいえば教授夫妻が新島を家族の一員として息子のよう扱っていたということであろう。新島はミス・ヒドゥンに、あなたの家にホームステイしていたと同じように、シーリー家では家族の一員として遇されています、と次のように報告している。「私は今寮の部屋にとどまり勉強していますが、食事はシーリー教授のお宅でとっています。教授は二、三週間西部へ行っておられ、先週の月曜日に帰宅されました。教授の留守中私は食卓の教授の席に座り、

食前の感謝の祈りをささげました⁶。

新島はアームスト・カレッジに在学中の三年間、休暇で寮から出なくてはならないとき及び休暇が終わりに近づき、寮に入れるまでの数日をシーリー宅で過ごすのが常であった。彼が在学中シーリー宅に最も長く滞在したのは彼の卒業の年、即ち一八七〇年三月から四月中旬までの六週間、リユーマチのために寒い寮からシーリー宅に引き取られ、夫妻に手厚く看護されたときであった。新島はミス・ヒドゥン宛の手紙で「私はまだシーリー教授宅にいます。彼と彼の妻はいつも私に親切で、主が私のためにこんな良きサマリヤ人をご用意下さったことを感謝しています⁷。」と書いている。彼は四月一三日、ヒンズデールのプリント牧師夫妻の家に移るが、一週間経ってシーリー夫人に次のような感謝の手紙を書き送っている。「私はお宅を離れて以来、しばしば貴女のことを考えています。私は貴女のお宅で楽しんだあらゆることが私の記憶によみがえります。病気の間、貴女は何と優しい愛情と親切な看護を私に与えて下さったことでしょうか。私はどれだけあの冷たいアイスクリームと、選りすぐったビフステーキ、牡蠣のスープを楽しんだことでしょうか。私はどれだけ貴女や貴女のお子さんたちが安息日の夕方に歌う美しい歌に耳を傾けて楽しんだことでしょうか。私がゲームで優勢になった時のウィリーの興奮した顔を見ると、何と面白い絵になるでしょうか。ベシーとアニ

ーが私の部屋に入ってきて、私と一緒にいる時、何と彼女たちは優しく、可愛らしく見えたことでしょうか。すべてが私に楽しく愉快で、丁度私の眼の前に懸っている美しく描かれた絵のように思われます。私は貴女や教授がして下さいた一切のことに對して常に感謝しており、私の霊が存在する限り、私はそれを思い出すでしょう。とりわけ私は貴女のような良きサマリヤ人にお会いできるような場所に私を置いて下さった主に感謝しています。私は以前以上に親切に取り扱って下さる主に感謝し、主の導きに謙虚に従うことができよう私のためにお祈り下さい。私の現状からして、今貴女のご親切に報いることはできませんが、私はいつも神の御座の前で貴方がたのご家族を思い出すでしょう⁸」。

新島は二年半前アームストの町にやって来て以来、親身になつて世話をしてくれるシーリー教授夫妻に對して深い感謝の念を抱いていたが、とくにニューイングランドの厳しい寒さの中で激しいリユーマチに襲われて苦しんでいる時、暖かく自宅に迎え入れ、手厚く看護してくれた夫妻にいくら感謝してもし尽くせない気持を抱いていた。右記の手紙を送つて三カ月後、彼はもう一度次のような感謝の手紙を教授夫妻に送っている。「私は貴方がたのお宅の応接間や居間や勉強部屋や或いは食堂にいるとき、貴方がたがおられることを大切に思うのです。きつと貴方がたの信仰心

の感化力にたえず清められていたのでしょう。私は貴方がたの面前にいる時、いつもそれ程罪深くは感じませんでした。私は貴方のもとでは哲学を学びませんでした。しかし私は貴方と共に長くいることによって、或る程度貴方の信仰深い人格とキリスト者としての愛を学びとる非常な特権を得ることができました。ですから私には不思議にも貴方がたのお宅に私をつれてきて下さった主に感謝する大きな理由があるのです。私は貴方がたの一人お一人を大変懐しく思っています。私は貴方がたのために祈ることができるといふことを嬉しく思います。(中略)貴方がたが私にキリスト者としての愛を示されることが私を刺激し、私が他者に対しても同じことをするようにさせるでしょう^①。

新島のこれらの手紙を通して彼がアームスト・カレッジ時代、如何にシーリー教授夫妻から人格的・宗教的感化を受けているかを理解することができる。次にシーリーとはアームスト・カレッジにおいてどのような働きをした教授であるかについて述べたい。

II

シーリーは一八二四年の生れであるから新島より一九歳年上であり、新島がアームスト・カレッジに入学したときは二四歳、シーリーは四三歳であった。

シーリーは一八四九年にアームスト・カレッジを卒業後

ニューヨーク州にあるオーバーン神学校 (Auburn Theological Seminary) に学び、一八五二年に卒業してすぐドイツに留学^②、ハレ大学 (Universität Halle) で一年間哲学を研究した。帰国後オランダ改革派の牧師に就任し五年勤めた。一八五八年アームスト・カレッジの哲学教授の職を得、彼の教育者、思想家としての生活が始まる。

シーリーは一九世紀中葉、ニューイングランドの哲学者エマーソン (R. W. Emerson, 1803-82) やソロー (H. D. Thoreau, 1817-62) が影響を受けた超越主義 (Transcendentalism) の立場をとり、彼にとつて宗教と哲学は不可分であった。一八七二年、シーリーはインドを訪れ、「教養あるヒンズー教徒への講義」"Lectures to Educated Hindus"と題して一連の講演をおこな^③、翌年 *The Way, the Truth, and the Life* とつう題の講演集を刊行した。

シーリーはインドに行く途中日本に立ち寄り、一八七二(明治五)年八月三〇日、東京麻布善福寺のアメリカ公使館で新島の父親民治と会っている。民治は息子の消息を聞き、恐らく涙を流してシーリーに感謝の気持を伝えたであろう。シーリーは九月八日(日)には横浜のキリスト教徒の集会で説教をし、留学中の新島について言及している。また日は特定できないが、彼は東京築地にできたユニオン・チャーチの献堂式で説教した^④ことや鎌倉大仏を見たことが判っている。滞日中のシーリーの言動は逐一課者によつて

太政官に報告され、明治五年の謀者報告「壬申八月上旬東京横浜邪宗門事情書」に詳しい。

シーリーはスターンズ学長亡きあと一八七六年から学長に就任し、その間一八七五年から七七年まで連邦議会の下院議員を一期勤めている。彼は共和党議員と行動を共にし、南北戦争の強い憎しみを持續させるような提案には一貫して反対した⁷⁾。

教育者シーリーを面目躍如とさせる例を幾つか挙げると、アーモスト・カレッジ時代、新島とルーム・メイトであったホランド (W. J. Holland) が一八六八年八月、両親宛の手紙で次のように報告している。「今朝ジュリアス・シーリー教授の最初の哲学の授業がありました。シーリー教授は本当にすばらしい人です。形而上学者として先生はこの国で誰にもひけをとりませんし、人間としても高潔な方です。ジュリアス先生のクラスではつめこんだ頭の中味を繰返し吐き出すだけではだめで、先生は学生に全部の能力、つまり判断力、分析力と総合力の一切を行使させます。神がご親切にも理性的な人間に与えてくださったすべての能力をです。この教授は生き字引です。ぼくはこの先生の下で、もつと立派な人に、そしてもつと立派なクリスチャンになりたいと思います。なぜなら先生は学問以外に純粹な敬虔さと堅実な性格を備えておられるからです」。

もう一つ教育者シーリーの面目を紹介したい。これは新

島の斡旋で一八八五年から八八年までアーモスト・カレッジで学ぶことになった内村鑑三が『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中で彼が如何にシーリーから人格的、学問的影響を受けたかを次のように述べている。「総長先生彼自身にまさって余を感化させたものはなかった。彼がチャペルで起立し、讚美歌を指示し、聖書を朗読し、そして祈ることで十分であった。余は尊敬すべき人を一目見るというただ一つの目的のためにも、けっして余のチャペル礼拝をカットした(すなわち欠席した)ことはなかった」。

内村は彼のエッセイ集である『流竄録』の中でシーリーがしばしば“Amherst aims to teach its student how to think for himself.”と語ったことを述べ、引き続き「教育の目的を以て事実の暗誦にありとするは誤謬の最も甚だしきものなり、吾人は学問せんが為に学校に行くにあらざりて、学問する法を学ばんが為に行くなり。」と述べている。内村はシーリーの言葉「アーモスト・カレッジの教育目的は学生に自力で考え、生きる方法を学ばせることにある」という表現の中に、シーリーのそしてアーモスト・カレッジの教育目的を発見したといえよう。

シーリーは学長時代の一八八〇年にアーモスト・システムと呼ばれる「学生賢人会議制」を導入した。これは学生間の選挙で四年生から四人、三年生から三人、二年生から二人、一年生から一人を選出させ、月に一度学長の司会で

賢人会議を開き、学内の風紀、道徳、その他学生生活にかかわる問題を討議させ、退学、停学等の処罰もこの会議にかけ¹¹るというもので、この学生の主体性、自治を重んずるアーモスト・システムは全米の他の大学にも影響を及ぼした。

アーモスト・カレッジの大学史の書物に、シーリーの次のようなエピソードが紹介されている。すなわち或る学生が将来牧師になるために必要なヘブライ語を今学期選択すべきか、化学(chemistry)を選択すべきかについてシーリー学長に相談に来たところ、シーリーはその学生に化学をとるように次のようなアドヴァイスをした。もし君が牧師になるのであれば、今君が必要なのはヘブライ語ではなく化学である。ヘブライ語はとにかく後年とらねばならないだろう。しかし今化学をとる最後のチャンスである。君の牧師在任中に全ての科学(science)を根本的に変革する化学(chemistry)の進歩があるだろう。我々が化学を課しているのは君の生涯を通してこの問題に関して君を聡明にするためである。このエピソードが示すものは牧師であり、道徳哲学の教授であったシーリーの将来展望の確かさと学問的幅の広さである。なぜなら一八八〇年代工業化が急速に進む中で、シーリーは化学の果たす役割を把握し、牧師といえども最先端の科学とりわけ化学の専門知識をもつておく必要性をアドヴァイスしているからである。

新島は以上のようなシーリー教授に学び、彼の人生観、教育観を構築していったと考えられる。

それでは次に新島がアーモスト・カレッジを卒業し、彼が亡くなるまでのシーリーとの交わりについて述べよう。

III

新島は一八七〇年三月から半年間もリユーマチに苦しむが、やっと回復し九月からアンドーヴァー神学校に学ぶことになった。この年のクリスマスに彼はシーリー夫妻からプレゼントとして懐中時計を贈られることになったが、その喜びを次のように述べている。「選り抜かれた最もお心のこもったクリスマス・プレゼントに対して、貴方がたは私に如何に幸せを感じ、感謝しているかをお判りいただけるでしょう。私は貴方がたに私の感謝の気持をどのように表現すべきか知りません。本当に私の言葉やペンは役に立たないのです」¹²。

新島は神学校在学中の一八七二年三月、岩倉使節団の田中不二麿の通訳を引き受けたが、その後神学校を休学してヨーロッパへの教育視察に同行すべきか迷っていた。彼はハーディー夫妻に相談し、シーリーに相談して彼から“Peter go.”といわれ、色んな人々から行くことをすすめられて行く決断をしている。彼は田中とヨーロッパ七カ国を訪れ、最後にドイツのヴィースバーデンでリユーマチの湯

治をしていた時、日本經由でインドで講演した後ベルリンに来ていたシーリーから手紙を受けとった。彼はその返事に、教授が東京で父民治に会った様子を詳しく聞きたく思いい、できればすぐ荷物をまとめて教授とアメリカへ戻りたい、と書いている。

新島は日本への帰国の直前の一八七四年九月、ボストンのマウント・ヴァーノン教会で按手札を受けるが、シーリーは新島のために記念説教をし、同年 *The Congregationist* の一〇月号に“Narrative of a Japanese”即ち「日本人物語」と題するエッセイを載せ、彼は新島の生い立ちから説き起し、密航を企てキリスト者になるまでの経緯を詳しく述べている。

新島は一八七四（明治七）年一月、一〇年四カ月ぶりで帰国するが、帰国後もシーリー夫妻に長い手紙を送り、学校のこと、宣教のこと、家族のことを詳しく報告し、シーリー家の子供たちにも強い関心を示している。彼は一八七五（明治八）年一月、シーリー宛に手紙を送り、一〇年ぶりの両親との劇的な再会の様子から早速近隣の人々に福音を説き始めたこと、東京に出て大学設立について友人に話すと、東京に創るよういわれたこと、一月三日の日曜日は貴方がその献堂式で説教した東京で最初にできた教会で私も説教したこと、貴方が連邦議会の議員に選ばれたことは貴方のためではなく、合衆国のために喜ばしいことな

どを詳しく伝えていた。

新島はシーリー夫人にも教授と同じかそれ以上に頻繁に手紙を書いており、同志社英学校開設後五カ月目の一八七六（明治九）年三月、夫人に宛てて次のような内容の手紙を送っている。まず京都の僧侶たちが多く妨害に出、キリスト教を京都で教えられないように知事に陳情しているが、現在個人の家では説教する自由があること、神の摂理によつて或る婦人と親しくなり、結婚して現在幸せに暮していること、良き伴侶を得たので健康が徐々に回復に向っていることを報じ、妻八重の写真を同封している。

新島は同年一二月のクリスマス・イブにシーリー夫妻に別々に手紙を書き、シーリーにはアーモスト・カレッジの学長就任に対して次のような祝辞を送っている。「我が愛するアーモスト・カレッジが貴方にとつて非常に貴重であつたように、貴方は今やカレッジにとつて貴重な存在になるに違いありません。カレッジが多くの精神的戦士を育て上げる上で上出来の乳母であつたように、貴方の経営のもとではカレッジは以前以上に多くの戦士を育て上げることを期待しています」。

一八七七（明治一〇）年、新島はシーリー夫妻に長い手紙を送っている。彼は学生たちがピューリタンの生活を守っていることを述べ、「私は愛するアーモスト・カレッジが貴方の国に対してそうであるように、私共のお粗末な教育

機関が日本においてクリスチャン文明の中心になることを私は日々祈つています。」と書いている。またこの手紙では札幌農学校のクラーク博士が京都を訪れ、楽しい時を過ごしたことも伝えて³いる。

一八八一（明治一四）年、小崎弘道がシーリーの講演集である *The Way, the Truth and the Life* (1872) の教章を訳して『宗教要論』と題して出版するが、新島は序文を寄せてシーリーを次のように紹介している。

夫レシーレー氏先生ハ目今米国屈指ノ鴻学士ニシテ、其学深く、其芸達シ、政事学、経済学、理学、神学等ハ其尤モ長スル所トス、曾テ聘セラレテ馬州アモルスト邑ノ「アモルスト」大学ノ教員トナリシニ、居ル数年間、一生徒ノ先生ニ向ツテ片言隻語ノ不平ヲ鳴ラセシ者ナク、且先生ノ名望ヲ慕ヒ、千里ヲ遠シトセスシテ箴ヲ此校ニ負ヒ、其薰陶ヲ望ム者陸續踵ヲ接シタリ、嗚呼先生ノ如キハ啻ニ学識ニ富ミ教育ノ術ニ達セルノミナラス、其徳望ノ高クシテ其品行ノ正シキ、其容貌ノ偉ニシテ其言論ノ簡ナル、一見人ヲシテ其風ヲ仰キ、其人トナリヲ賛歎シテ措カザラシム、豈希代ノ碩学ト謂ハザルベケンヤ（中略）予ノ曩ニ米国ニ遊学セシヤ親シク先生ノ教誨ヲ受ケ、屢食卓ニ侍リ、遊歩ニ随ヒ、家族同一視ノ眷顧ヲ蒙リタレバ、此訳書ヲ閲読スルニ當リ懐旧感恩ノ情已ム能ハザル者アルナリ。⁴

このシーリーについての紹介文に新島が一八六七年以来一四年間の親しい交わりの中で得たシーリー像を立体的に描いている。

一八八一（明治一四）年七月、新島はシーリー夫人が亡くなったことを知り、その驚きと悲しみの大きさを次のようにシーリーに伝えている。「私は彼女を私のアメリカの母たちの一人だと主張しておりましたし、彼女のそばに居るとき、私は豊かさを感じておりました。（中略）私がアモストにいる間、彼女の私に示された本当の親切に対して、私はどれくらい恩を受けているかを申さねばなりません。それは私の心の中に消すことのできないインキで書かれています。私はそれを常に記憶してきましたし、私が生きている限りそうするでしょう。私は彼女が私にして下さったことを他者にすべく努めようと思⁵います」。

新島は一八八四（明治一七）年四月から翌年一二月まで静養と大学設立の募金を兼ねて欧米旅行に出発した。彼は同年九月ヨーロッパからアメリカに着き、ハーディー夫妻を始めシーリーに会っている。彼は一八八五（明治一八）年二月二八日から三月五日までアモストのシーリー宅に泊まり、シーリー夫人亡きあとの家族と再会している。彼は三月一日にはアモスト・カレッジの礼拝に出席し、シーリー学長の説教を聴き、二日には心臓病で床についている W・S・クラーク博士を見舞い、五日にはシーリー学長



アーモストのワイルドウッド共同墓地にあるシーリー教授と夫人の墓
シーリー教授には「神の御心を行う人は永遠に生き続けます」(ヨハネの手紙1、2-17)
夫人には「愛にとどまる人は神の内にとどまり、神もその人の内にとどまっております」(ヨハネの手紙1、4-16)の聖句が刻まれている。

から、ギリシア語、ラテン語及び数学ができる日本人学生を六名までアーモスト・カレッジに入学させる旨の約束をとりつけている⁽¹⁾。その第一号が内村鑑三であった。

シーリーは八月一二日付で新島に手紙を送り、その末尾

に次のように書いている。「私達は貴方が帰国する前にもう一度お会いしたいと思います。私達の家がいつも貴方の我が家の一つであり、いつも歓迎されていることをどうぞご記憶下さい⁽²⁾」。

同年一〇月末、新島は、シーリーの長女ベシーが新島の妻八重にプレゼントしたバッグに対して次のような感謝の手紙を書き送っている。「私の妻への貴女の手作りの美しいバッグを昨日受け取りました。きっと彼女は貴女の愛情の美しい印として受けとるでしょう。(中略)私は貴女がたのお母様が亡くなられたことを大変淋しく思いますが、貴女がたのなつかしい家庭を思い、貴女がたの暖かい歓迎を非常にありがたく思うといった貴重なものを私は沢山持っているのです⁽³⁾。シーリー家の新島や八重に対する暖かい配慮がうかがわれる。

新島の最晩年の一八八九(明治二二)年、シーリー学長の尽力でアーモスト・カレッジの理事会は新島に名誉法学博士号(D. D.)を授与することを決定した。新島は同年九月、シーリー学長にお礼の手紙を送り、その中で次のように述べている。「私の愛する母校からの特別のご配慮として非常に感謝の気持ちをもってお受けすることを決心しました⁽⁴⁾。彼は引きつづき「私はアーモスト・カレッジ時代の楽しい日々を思い出さざるをえません。私に対する貴方の道徳的、宗教的影響力が常に私のうちにあつて生き続けて

おり、意識的であれ、無意識的であれ働き続けていることを貴方に申し上げることをお許し下さい⁽⁵⁾。これは新島のシーリーに宛てた最後の手紙になった。彼は四カ月後の一八九〇（明治二三）年一月、大学設立の夢を果たしえないままに天に召された。この手紙は彼にとつて慈父ともいえるシーリーに対して二二年間の公私にわたる指導に対して、特に道徳的、宗教的感化に対して深い感謝の意を示したものである。

新島は日本国内はもとより、アメリカにおいても肉親に對するような深い心づかいをもって、彼のために尽くしてくれる多くの親友をもっていた。アメリカではその最たる人がハーデー夫妻であり、このシーリー夫妻であつた。新島はシーリーの人格を通して、人間として、キリスト者として、教育者として、学者として、大学の最高責任者として如何にあるべきかを学ぶことができた。そしてハーデー夫人やシーリー夫人にアメリカの女性の模範を見出し、妻の理想像を描くことができた。

新島は帰国後亡くなるまでの一五年間、全身全霊をもつて学生を始め多くの人々に教育的、宗教的、人格的感化を及ぼしたが、その生き方はシーリーのキリスト教人格主義を彷彿させるものがある。「金にメツキする必要はない」(You cannot gild gold.) といつて新島を高く評価するシーリーと、シーリーに全幅の信頼と敬愛の念を抱く新島一

彼らは民族を越えてキリスト教を媒体とする太い絆で結ばれていた。新島にとつてシーリーはアーモスト・カレッジ時代はもとより、生涯にわたつて偉大な人格であり、指導者であつたといえよう。

1

(1) A. S. Hardy ed., *Life and Letters of Joseph Hardy Nesima*, Houghton & Mifflin, 1891, P. 68

(2) *Ibid.*, P. 69

(3) *Ibid.*, P. 70

(4) Letter to Miss M. E. Hidden (Amherst, Sept. 8, 1867) 『新島襄全集』6 同朋舎出版一九八五年二〇%
ーヅ (以下『全集』と略す)

(5) 同 右

(6) Letter to Miss Hidden (Amherst, Dec. 8, 1869) 『全集』6 六〇%
ーヅ

(7) Letter to Miss Hidden (Amherst, April 12, 1870) 『全集』6 七三%
ーヅ

(8) Letter to Mrs. E. T. Seelye (Hinsdale, April 19, 1870) 『全集』6 七四%
ーヅ

(9) Letter to Prof. & Mrs. Seelye (Hinsdale, July 25, 1870) 『全集』6 七五-七六%
ーヅ

II

- (1) 「年譜編」『全集』8105ページ
- (2) 同 右106ページ
- (3) 同 右137ページ
- (4) Letter to Prof. J. H. Seelye (Osaka, April 27, 1875)
 オータス・ケーリ「新島とシーリー(一)」『基督教
 研究』第二九卷一号一九六五年四七ページ
- (5) 『全集』3 注解七五七—八ページ
- (6) 北垣宗治『新島襄とアモスト大学』山口書店一九
 九三年一九五ページ
- (7) *Dictionary of American Biography*, Vol. XVI, P.
 556
- (8) 北垣宗治前掲書一九一ページ
- (9) 内村鑑三著、鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒
 となりし乎』岩波文庫一九七六年一五七ページ
- (10) 内村鑑三『流竄録』『内村鑑三全集』3 一八九四—
 八九六岩波書店一九八二年八〇ページ
- (11) 北垣宗治前掲書一九六ページ
- (12) C. M. Fuess, *Amherst: The Story of a New England*
 College, P. 218
- III
- (1) Letter to Mrs. Seelye (Andover, Dec. 27, 1870) 『全
 集』6七八ページ
- (2) Letter to Prof. Seelye (Wiesbaden, March 10,
 1873) 『全集』6127ページ
- (3) *The Congregationalist*, Boston, Oct. 22, 1874
- (4) Letter to Prof. Seelye (Tokio, Japan, Jan. 10,
 1875) 『全集』9158—161ページ
- (5) Letter to Mrs. Seelye (Kiyoto, Japan, March 27,
 1876) 『全集』6171—172ページ
- (6) Letter to President Seelye (Kiyoto, Japan, Dec. 24,
 1876) 『全集』6177ページ
- (7) Letter to President & Mrs. Seelye (Wakayama,
 Japan, July 18, 1877) 『全集』9186ページ
- (8) 同 右
- (9) 「宗教要論」序 『全集』1457—458ページ
- (10) Letter to President Seelye (Kiyoto, Japan, July 11,
 1881) 『全集』6111—112ページ
- (11) 「年譜編」『全集』8218ページ
- (12) Letter to Rev. J. H. Neesima (Amherst, Mass.,
 August 12, 1885) 同志社社史史料編集所所蔵番号下
 二四九七
- (13) Letter to Miss B. E. Seelye (Boston, Oct. 27, 1885)
 『全集』9213—14ページ
- (14) Letter to President Seelye (Kiyoto, Japan, Sept. 3,
 1889) 『全集』9361—62ページ
- (15) 同 右361—62ページ